

様式C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成21年5月22日現在

研究種目： 基盤研究 (C)
研究期間： 2007～2008
課題番号： 19530171
研究課題名(和文) ケンブリッジ学派におけるウォルター・レイトン
研究課題名(英文) Walter Layton on the Cambridge School
研究代表者 近藤 真司(KONDO MASASHI)大阪府立大学・経済学部・准教授 50264817

研究成果の概要：

イギリスのケンブリッジ大学における経済学教育ならびに経済学の発展について研究を行った。これまでの研究では、ケインズを中心とする経済理論やピグーの経済的福祉の分析である厚生経済学をケンブリッジ学派と理解されることが一般的であった。そのため、ケンブリッジ学派における応用経済学の分野はほとんど明らかにされていなかった。本研究では、ケンブリッジ学派の創始者であるマーシャルのもとで教育を受けたレイトンを研究することからケインズやピグーの経済学とは違う応用経済学分野での彼の貢献を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成19年度	600,000	180,000	780,000
平成20年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野： 社会科学

科研費の分科・細目：経済学・経済学説・経済思想

キーワード：ケンブリッジ学派，ウォルター・レイトン，アルフレッド・マーシャル，
統計学，応用経済学，物価指数，労働問題，

1. 研究開始当初の背景

(1) アルフレッド・マーシャルは、ケンブリッジ学派の創設者として現代の経済理論の基礎を構築した人物として知られている。マーシャルは、自らの経済学体系において応用経済学的な分野に関しても重要な足跡を残している。しかし、この点に関してはマーシャル経済学の中で主要なものであるという位置づけは十分になされていないの

が現状である。

(2) マーシャルの下で教育を受けた人物としては、ケインズやピグーが存在する。その中には、マーシャルがケンブリッジ大学で創設した経済学トライポス（卒業試験）で最初に第1優等生の学位を取得したウォルター・レイトンが存在する。彼は卒業後ケインズとともに講師になり、ケンブリッジ大学の経済学部のスタッフとして教育・研

究に従事することになる。マーシャル自身は、ケンブリッジ大学で、理論的分野と応用的分野の両方にスタッフを充て、経済学教育の充実を計ったのである。ケインズが理論的側面の講義を担ったのに対して、レイトンは応用経済学の分野を担うことになる。

(3) マーシャルの経済学体系には理論的側面と応用的側面が存在する。レイトンはマーシャルの後者の後継者ということになる。そこでレイトンを研究することによりマーシャルの応用経済学の側面ならびにその分野の後継者がケンブリッジ学派に果たした役割を明らかにすることができる。

2. 研究の目的

(1) マーシャルは、ケンブリッジ学派の創始者として現代理論の基礎を構築した人物として知られている。ケンブリッジ学派においてはケインズを中心とする貨幣理論や経済理論に光があてられ研究が進められてきたが、ケンブリッジ学派においてケインズのそれらとは違う側面が存在し、最近、それらについて研究が進められている。レイトンを取り扱うことにより、ピグーやケインズとは違うケンブリッジ学派の経済学分野が明らかになる。

(2) マーシャルのもとで教育を受けた者たちが新たな経済学の領域と彼の経済学体系の未完部分、また当時の時代的課題を解き明かしていくことに精力を注いだ。レイトンの研究課題ならびに研究成果を考察することにより、ケンブリッジ学派の形成過程並びにマーシャルの経済学的課題や彼が十分体系化できずに、レイトンや弟子たちが深化させた研究分野も明らかになる。

3. 研究の方法

(1) レイトンの著作、ケンブリッジ大学トリニティカレッジに所蔵するレイトンペーパーを下に、レイトンの著作目録の作成、レイトンの業績の位置づけならびに検討を行う。

(2) レイトンの主要著作である『物価研究入門』(1912)、『資本と労働の諸関係』(1913)をもとにレイトンの産業経済学の検討と分析を行う。また、両著作の書評ならびにそれに関係する書簡についても検討を行う。さらに、P.Groenewegen(シドニー大学)が『資本と労働の諸関係』を中心に研究を行っているのに対して、両者を比較検討することによりそれらの関係性と位置づけも明らかにする。

(3) ケンブリッジ学派におけるレイトンの位置づけを行うため、レイトンの主要著作とマーシャルの継承性の検討を行う。そのた

め、マーシャルの初期の論文である「統計のグラフ的方法」(1885)「一般物価の救済策」(1887)とそれらとの関係をまとめた彼の『貨幣信用貿易』(1923)とレイトンの主要著作の関係を明らかにする。

4. 研究の成果

(1) レイトンの『物価研究入門』の研究

① 研究論文

平成19年度は、ケンブリッジ学派におけるレイトンの位置づけとして、彼の最初の著作である『物価研究入門』を中心に検討を行った。その研究成果を「ケンブリッジ学派におけるウォルター・レイトン——『物価研究入門』(初版)を中心として——」

(Discussion Paper New Series No.2007-2, 大阪府立大学経済学部, 2007年8月)にまとめた。

論文では、レイトンに注目することは、ケンブリッジ学派の形成過程ならびにピグーやケインズとは違うケンブリッジ学派の経済学分野も明らかにできるのではないかという問題提起を行い、分析・考察を行った。その結果明らかになったことは、レイトンはマーシャルから帰納法的な研究方法論を学び、それを新たな理論構築や経済分析道具の貢献に発展させるのではなく、当時に重要になりつつある統計分析に自らの能力を活かしたのである。レイトンがマーシャルから引き継いだ帰納法並びに統計分析はマーシャル自身が初期から持ち続けていたものであり、自らの体系の中で十分に展開できなかったものが弟子たちによって継承されていったのである。したがって、本年度の研究ではケンブリッジ学派におけるレイトンを、マーシャル経済学の伝統を受け継ぎ、「応用経済学」の分野に業績を残した経済学者として位置づけることができた。

② 学会報告

上記の研究成果を第43回経済社会学会全国大会(2007年9月22・23日神戸大学)において、上記のタイトル内容で報告を行った。

③ 査読誌への投稿

学会報告をもとに修正加筆し、経済社会学会に投稿し、「ケンブリッジ学派におけるウォルター・レイトン——『物価研究入門』(初版)を中心として——」(『経済社会学会年報』, 第30巻, 2008年, pp.113-123)に掲載された。

(2) ケンブリッジ学派におけるレイトンの位置づけの研究

① 研究論文と国際ワークショップ

ケンブリッジ学派におけるレイトンの位置づけに関する英語論文 'Alfred Marshall and

Walter Layton on the Cambridge School' を作成し, "International Workshop: Marshall and Marshallians on Industrial Economics" (2008年3月15・16日一橋大学) において報告を行った。

②学会報告

同名タイトルの論文を, 2008年5月15日～17日プラハにおいて開催されるヨーロッパ経済学史学会 (ESHET2008) において, 報告を行った。

③研究論文

上記の報告原稿をもとに, 修正加筆した 'Layton on Industrial and applied economics' というタイトルの原稿が T.Raffaelli, T.Nishizawa, S.Cook *Marshall, Marshallians and Industrial Economics*, Routledge Economics 2010年2月刊行される。この論文では, レイトンの研究業績は, ケンブリッジ学派において異質のように見えるかもしれないが, マーシャルの経済学方法論を踏襲し, 当時重要な研究テーマである物価研究を行った業績であることを考察した。さらに, ケンブリッジ学派においてレイトンは, マーシャルが十分に具体化できなかった応用経済学に貢献した経済学者であることを明らかにした。

(3)『物価研究入門』と『資本と労働の諸関係』の研究

①研究論文

レイトンの『物価研究入門』と『資本と労働の諸関係』をもとに, ケンブリッジ学派における位置づけならびに彼の労働者論を「ウォルター・レイトンの社会哲学」(Discussion Paper New Series No.2008-1, 大阪府立大学経済学部, 2008年7月) にまとめた。

本稿では, レイトンの業績をマーシャル理論の発展よりもその応用にあることを明らかにした。レイトンの『物価研究入門』は, マーシャルの「一般物価変動の救済策」に関する論文ならびに「労働委員会」等での発言内容をもとに当時の時代背景, 当時の歴史的資料を統計と数字で表現したものであることを論じた。さらに, 彼の著書はまさにマーシャルの論文ならびにその考えをもとに統計と物価指数という分析道具によって現実を説明する応用経済学の著作であることを主張した。さらに, レイトンの『資本と労働の諸関係』は, マーシャルの『産業経済学』や『産業経済学要論』でページを割いて取り扱っている労働組合について議論を深めた著作であることを明らかにした。つまり, レイトンの『資本と労働の諸関係』をマーシャルの労働問題への関心を引き継いだ書物として評価した。

②研究会報告

「市場社会をめぐる研究会」(平井俊顕上智大学教授主催) において, 「ケンブリッジの社会哲学」という共通テーマを設け, 各人ケンブリッジの市場社会論について報告を行っている。そこで, 上記論文の作成過程と作成後において, 「レイトンの社会哲学」について, 2度報告(平成20年1月13日, 11月9日, 場所: キャンパスプラザ京都) を行っている。

③研究著作

上記の研究会の成果が平井俊顕編著『市場社会論のケンブリッジ的展開』(2009年6月, 日本経済評論社) として出版される。本書は, 「市場社会とは何か」というテーマを19世紀後半から20世紀前半にかけてケンブリッジで展開された市場社会論を対象に検討することで, その多様性と巷のみならず経済学界で普及している「経済思想」にまつわる偏見と誤謬を是正すること, その上で市場社会の今日的状況をとらえるうえで確たる知的ベースを提供することを目的として企画された研究書である。

報告者は, 本書の第8章「レイトン—労働者論」を担当している。そこでは, レイトンは, マーシャルから帰納法的方法論を学び, それを新たな理論構築, 分析道具の発展に貢献したのではなく, 当時重要になりつつ統計分析に自らの能力を活かし, その成果をまとめたものが『物価研究入門』であることを明らかにした。また, マーシャルの労働問題への関心を引き継いだ書物が『資本と労働の諸関係』であると評価した。レイトンは, 労働者にとって産業不安をなくし, いかにすれば公正な賃金を獲得できるかを示した。さらに, 彼にとっての政府の役割としては, 労使間の問題に積極的に干渉するのではなく, 両者の交渉がスムーズに行われるように環境を整備することが必要であることを明らかにした。また, レイトンは労働と資本の協同の必要性を強調していることからマーシャルからの継承であることも指摘した。

本研究からケンブリッジのレイトンは, マーシャルが創設した経済学トライボスから生まれた経済学者であり, 応用経済学の分野において業績を残した人物であることを明らかにした。さらに, レイトンの起源であるマーシャル経済学の中にも「応用経済学」的な側面が存在することも主張した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

①近藤真司「ウォルター・レイトンの社会哲学」*Discussion Paper New Series* No.2008-1, 大阪府立大学経済学部, 査読なし, 2008年7月, 21ページ。

②近藤真司「ケンブリッジ学派におけるウォルター・レイトン—『物価研究入門』(初版)を中心として—」, 『経済社会学会年報』, 査読有り, 第30巻, 2008年, pp.113-123。

③近藤真司「ケンブリッジ学派におけるウォルター・レイトン—『物価研究入門』(初版)を中心として—」*Discussion Paper New Series* No.2007-2, 大阪府立大学経済学部, 査読なし, 2007年8月, 21ページ。

[学会発表] (計1件)

Masashi KONDO 'Alfred Marshall and Walter Layton on the Cambridge School', European Society for the History of Economic Thought, 12th Annual Conference, 15th-17th May, 2008, University of Economics, Prague.

[図書] (計1件)

近藤真司 第8章「レイトン—労働者論」, 平井俊顕編著『市場社会論のケンブリッジ的展開』, 2009年6月, 日本経済評論社, pp.183-212.

[その他]

Masashi KONDO 'Alfred Marshall and Walter Layton on the Cambridge School', International Workshop: Marshall and Marshallians on Industrial Economics, 2008年3月15・16日—橋大学。

近藤真司「討論者」山本堅一「マーシャルの経済生物学の意義」, 経済学史学会第72回全国大会, 2008年5月24・25日, 愛媛大学。

Masashi KONDO 'Discusstant' K.Caldari T.Nishizawa' Marshall's idea on Progress: roots and difusion, Joint Conference ESHET-JSHET, Hitotubashi University, 21-22 March 2009.

Masashi KONDO 'Discusstant', A. Carabelli, M.A.Cedrini, 'Indian currency and beyond', Joint

Conference ESHET-JSHET, Hitotubashi University, 21-22 March 2009.

Masashi KONDO 'Discusstant', G.Dostaler, 'The Arrival of Keynes and Keynesian in Canada and in Quebec', Joint Conference ESHET-JSHET, Hitotubashi University, 21-22 March 2009.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

近藤 真司 (KONDO MASASHI)
(大阪府立大学・経済学部・准教授・50264817)